

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 2001年度

榛原町文化財調査概要 26

2003

榛原町教育委員会

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 2001年度

榛原町文化財調査概要 26

2003

榛原町教育委員会

例　　言

- 1 本書は、平成13年度（2001年度）に株原町教育委員会が国庫補助事業・県費補助事業として実施した「株原町内遺跡」の発掘調査概要報告書（株原町文化財調査概要26）である。
- 2 発掘調査は、平成13年（2001年度）5月8日に着手し、平成14年（2002年）3月29日に終了した。なお、本書の刊行は、平成14年（2002年）度事業として実施したものである。
- 3 現地調査は、奈良県教育委員会及び奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと、株原町教育委員会生涯学習課主任 柳澤一宏が担当した。
- 4 調査組織及び関係者は、「I 埋蔵文化財発掘調査の概要」に掲載している。
- 5 測量図及び遺構図の方位は、国土座標第VI系を基準とする座標北を用いているが、一部には磁北（M. N）も使用している。
- 6 土層の色調は、「新版標準土色帖」1997年後期版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修（財）日本色彩研究所色票監修）を参考にしている。
- 7 各遺跡の調査記録、出土遺物等は、株原町教育委員会において保管している。
- 8 本書の執筆は柳澤、一部を横澤慈が行い、編集は柳澤が行った。

目 次

目 次

I 埋蔵文化財発掘調査の概要	1
1 埋蔵文化財発掘調査等の概要	
2 調査組織等	
II 位置と環境	5
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 沢遺跡第9次発掘調査概要	7
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
5 抄録	
IV 澤城跡第1次発掘調査概要	25
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
5 抄録	

報 告 書 抄 録

I 埋蔵文化財発掘調査の概要

1 埋蔵文化財発掘調査等の概要

榛原町では、1968年（昭和43年）以降、土木工事等の開発行為に伴い、生活環境をはじめ、地理的環境・歴史的環境も大きく変化してきている。土木工事等の開発行為の増加とともに埋蔵文化財の発掘調査も町内各所で行われ、周辺の山野とともに大きく景観を変え、その姿を消している。

このような状況のもと、榛原町教育委員会では、1986年に町内遺跡の遺跡詳細分布調査を実施し、いわゆる「遺跡地図」の整備をはかり、「榛原町遺跡分布調査概報」を刊行した。その後、新たな調査成果等をもとに、1993年には『榛原町遺跡分布地図』を刊行し、「遺跡地図」の改訂を行い、埋蔵文化財の保存・活用をはかっていく基礎資料としている。

毎年、町内各所で開発行為が計画・実施されており、埋蔵文化財の取り扱い等については、『榛原町遺跡分布地図』をもとに事業者等とその都度、協議を重ねているところである。

2001年度（平成13年度）に榛原町教育委員会が取り扱った遺跡有無確認調査、埋蔵文化財発掘届・通知、発掘調査等は表1のとおりである。また、2001年度（平成13年度）に実施した発掘調査等は表2・図1のとおりである。なお、本書には、国庫補助事業・県費補助事業として実施した事業のうち、沢遺跡（9次調査）、澤城跡（1次調査）の調査概要を収録している。下城・馬場遺跡については、2002年度（平成14年度）も継続して発掘調査を実施しているので、本書には収めていない。

表1 2001年度（平成13年度）発掘届・発掘調査件数等一覧表

道跡有無確認 調査	埋蔵文化財 発掘届 (民間)	埋蔵文化財 発掘通知 (公共)	埋蔵文化財 発掘調査届・通知 合計	発掘調査 件数 (町担当)	工事立会 (町担当)	測量調査 (町担当)	調査件数 合計
0	6	2	8	3	2	1	6

摘要 種別	遺跡名	所在地	調査原因	原因者	工事種別	措置等
埋蔵文化財 発掘届 (民間)	山辺三中村遺跡	榛原町山辺3 1142-1他	個人住宅建設工事	橋野博彦	295	2001年度 町工事立会
	丹切遺跡	榛原町萩原元萩原499	農地造成工事	板垣美津代	826	事業未着手
	澤城跡	榛原町大貝299	山道整備工事	沢・大貝史蹟懸彰会	4,825	2001年度 町発掘調査
	沢遺跡	榛原町沢1413-1	個人住宅建設工事	小西正直	120	2001年度 町発掘調査
	萩原葉山田遺跡	榛原町萩原元萩原2235, 2236	個人住宅建設工事	上野元嗣他	90	2002年度 町発掘調査
	丹切遺跡	榛原町萩原元萩原164-5	事業所建設工事	辻合衡長	130	2002年度 町工事立会
埋蔵文化財 発掘通知 (公共)	坊ノ浦遺跡	榛原町自明	河川改修工事	奈良県 (大字蛇土木事務所)	1,081	2001年度 町工事立会 (事後通知)
	坊ノ浦遺跡	榛原町自明	河川改修工事		1,600	2001年度 県工事立会

表2 2001(平成13年度)発掘調査等一覧表

番号	調査種別	発見遺跡番号 奈良県地図番号	遺跡名	調査地	現地調査期間	調査原因 (原因者)	調査概要			備考	
							調査面積 (m ²)	遺構	遺物		
1	発掘調査	2-524 15-D-79	澤城跡 (1次調査)	橿原町大貝299 山道並幅工事 (洪・大日史跡顕彰会)	2001.11.19 2002.3.29	山道並幅工事 (小西正直)	50 土器など	ピット、土坑、 土器、陶器、瓦器、 磁器、鉛玉、鐵 貨	須恵器、黒色土 器、土師器、瓦器、 磁器、瓦、 陶器、磁器 土製品(須恵器2 点、瓦工芸)、鐵石	绳文時代～中世 の遺物散布地 時代～弥生 時代の墓葬跡	本書所収
2	発掘調査	2-544 15-D-84	沢 造 跡 (3次調査)	橿原町沢1413-1 個人住宅建設工事	2002.2.6 2002.2.26	個人住宅建設工事 (小西正直)	12 土坑、溝	須恵器、黑色土 器、土師器、瓦器、 磁器、瓦、 陶器、磁器 土製品(須恵器2 点、瓦工芸)、鐵石	須恵器、黒色土 器、土師器、瓦器、 磁器、瓦、 陶器、磁器 土製品(須恵器2 点、瓦工芸)、鐵石	绳文時代～中世 の遺物散布地 時代～弥生 時代の墓葬跡	本書所収
3	発掘調査	2-546 15-D-90	下城・馬場遺跡 (8次調査)	橿原町沢1288-1,292 個人住宅建設工事 (後原町)	2002.2.13 2002.3.29	範囲確認調査 (後原町)	285 カット面	土坑、ピット、溝、 瓦器、瓦質土器、 骨磁、陶器、磁器、 瓦、壁土	須恵器、土師器、 瓦器、瓦質土器、 骨磁、陶器、磁器、 瓦、壁土	绳文時代～古墳 時代・中世の遺 物散布地	中世の居館跡
4	測量調査	2-524 15-D-79	澤城跡 (1次調査)	橿原町沢・大貝 個人住宅建設工事 (後原町)	2001.10.29 2002.3.22	範囲確認調査 (後原町) 河川改修工事 (奈良県)	77,000 平坦面、土壘、 堀切など			中世の山城跡	
5	立会調査	4-3 103-5	坊ノ池遺跡	橿原町自用	2001.4.18	河川改修工事 (奈良県)	3 なし		なし	绳文時代・古墳 時代の集落跡、 中世の莊園跡、 绳文時代～中世 の遺物散布地	工事着手 後の立会
6	立会調査	3-8 103-36	山迎三中村遺跡	橿原町山迎三 1142-1, 1144-2	2001.5.14 (檜野博彦)	個人住宅建設工事 (檜野博彦)	なし		なし	绳文時代～古墳 時代・平安時代 ～中世の遺物散 布地	



図1 2001年度（平成13）調査遺跡位置図

2 調査組織等

2001年度の現地調査(沢遺跡、澤城跡)及び整理作業等の関係者は、次のとおりである(敬称略)。

総括教育長 田村義治

庶務事務局長 米田 実

生涯学習課

課長 石本淳應

課長補佐 打越明美

主任 合田憲二

沢遺跡(第9次調査)

調査技師 柳澤一宏

補助員 井上好美、横澤慈、上西高登、山岡政郁、笠井健嗣、鷹野義朗、峯健太郎

作業員 遠藤晴見、城山巖、正寿孝子、古川マサエ、古城シズ子、戸内秀子

指導・助言 奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所

協力 沢自治会、小西正直

澤城跡(第1次調査)

調査技師 柳澤一宏

補助員 井上好美、横澤慈、上西高登、山岡政郁、笠井健嗣、鷹野義朗、峯健太郎、岡祐二

作業員 遠藤晴見、遠藤 賢、城山巖、正寿孝子、古川マサエ、古城シズ子、戸内秀子

測量業務委託 (株)ワールド

指導・助言 奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、辻本宗久、金松誠

協力 沢自治会、大貝自治会、沢・大貝史跡顕彰会、西岡隆

II 位置と環境

1 地理的環境

奈良盆地の東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では大宇陀町、株原町、菟田野町、室生村、曾爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」とも総称されている。口宇陀は標高300~400mの丘陵とこの間を縋って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも呼ばれ、大宇陀町、株原町、菟田野町の大半がここに含まれている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの険しい山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。口宇陀地域の主要河川は、西に宇陀川、東に芳野川があり、幾つもの小河川を合わせながら株原町萩原で宇陀川本流となる。株原町を後にした宇陀川は三重県で名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へと至り、大和川流域とは水系を異にしている。

株原町の四周は概ね標高約400~800mの山塊に囲まれ、東は高城岳、三郎岳、室生村へと通じる石割峠があり、北は大和高原とを区切る額井岳、香醉山、鳥見山などの山々が屏風状に連なり、宇陀の地を見下ろしている。西は桜井市や大宇陀町、南は菟田野町となっており、丘陵稜線をもつてそれぞれの境界としている。地形的にみれば株原町の西半は口宇陀的、東半は奥宇陀的な様相を呈している。



図2 株原町位置図

2 歴史的環境

宇陀地方は、「古事記」、「日本書紀」をはじめとする多くの文献に度々登場し、これらの内容等からこの地は軍事・交通の要衝であったことを窺い知ることができ、今に残る地名や伝承なども多い。また、株原町を流れる宇陀川・芳野川・内牧川流域の各所には多くの遺跡が分布しており、発掘調査・分布調査を重ねるたびにその数も増加している。

これまでに、宇陀郡内では4点の有茎尖頭器が出土しており、うち、3点が町内から出土していることが明らかとなっている。これらは、縄文時代草創期に求めることができ、この頃が宇陀地域の歴史の初源であろう。

縄文時代の遺跡の多くは、先述の河川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等に認められる。これらの遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。また、発掘調査によって確認された場合でも、数点の遺物が出土しているのみで遺跡の全容が明らかになつたものは少ない。このような状況のもと高井遺跡や坊ノ浦遺跡では、早期から後期にわたる集落跡

であることが発掘調査によって明らかとなっている。

弥生時代前期から中期の遺跡は、沢遺跡、下城・馬場遺跡、大貝ヒジキ山遺跡、上井足北出遺跡をはじめとする数遺跡が知られているにすぎないが、後期の遺跡は比較的多く認められる。これらは、地理的制約のためか奈良盆地で見られるような大規模な集落ではないが、次代の古墳時代へと継続するものが多い。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓は、これまでに野山遺跡群、能峠遺跡群、下井足遺跡群、大王山遺跡群、キトラ遺跡などで確認されている。弥生時代後期の集落としては、高塚遺跡、能峠中島遺跡、上井足北出遺跡、古墳時代の集落としては、先の遺跡の他、戸石・辰巳前遺跡、高田垣内遺跡、谷遺跡、石榴垣内遺跡などを挙げることができ、谷部を流れる川跡や堅穴住居跡などが確認されている遺跡もある。

古墳時代前期の古墳は谷畑古墳、中期の古墳としては高山1号墳、シメン坂1号墳、前山1号墳などが発掘調査によって明らかにされている。後期となると古墳数は著しく増加し、ある程度の粗密があるものの、町内各所の尾根上には数基から十数基単位で分布している。5世紀後半からから盛期を迎える古墳群は野山古墳群、沢古墳群、栗谷古墳群、大王山古墳群、丹切古墳群などが知られている。6世紀後半以降、今までの木棺直葬墳にかわって横穴式石室墳が築造されるようになり、丹切古墳群、能峠古墳群、石田古墳群、大貝古墳群、西谷古墳群をはじめ、多くの古墳が発掘調査によって状況が明らかになっている。

横穴式石室にかわる新しい葬法として火葬墓が登場してくるが、最も代表的なものが、壬申の乱で活躍した將軍のひとりで渡来系氏族でもある文祢麻呂の墳墓である。現在、墳墓は史跡、墓誌などの出土品は国宝となっている。

古代末には、宇陀においても莊園の開発が急速に進み、このなかで台頭してきた在地武士団は、興福寺、春日社などの支配のもと各自が發展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏・沢氏・芳野氏に代表され、彼らは秋山城、沢城、芳野城をそれぞれの居城としていた。また、小規模な城館跡も各所に点在しており、城館の廃絶後、中世墓地と化したところもある。いわゆる中・近世墓地は、まとまったところでは、大王山遺跡、能峠遺跡群、八咫烏遺跡群、野山遺跡群などが発掘調査により明らかにされている。

紙幅の都合上、多くを述べることができないが、「位置と環境」は、以前からも他の報告書等に記載されており、次の文献が詳しい。

『宇陀・丹切古墳群』	奈良県教育委員会	1975
『大王山遺跡』	棟原町教育委員会	1977
『能峠遺跡群』 I	奈良県教育委員会	1986
『下井足遺跡群』	奈良県教育委員会	1987
『野山遺跡群』 I	奈良県教育委員会	1988
『高田垣内古墳群』	奈良県教育委員会	1991
『大和宇陀地域における古墳の研究』	宇陀古墳文化研究会	1993
『石榴垣内遺跡』	奈良県教育委員会	1997

III 沢遺跡第9次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

沢遺跡は奈良県宇陀郡株原町大字沢に位置し、現状は大半が畠地、一部が宅地や道路となっている。この遺跡は1955年（昭和30年）の沢集落内の町道拡幅工事に伴って多くの遺物が出土したことによってその存在が知られるようになり、その後、1963年（昭和38年）に第1次調査、1987年に第2次調査が行われている。株原町教育委員会では、1991年以降、断続的に発掘調査を重ねているところである。

遺跡中央部の標高約334mの宅地において、個人住宅改築工事が計画され、2002年（平成14年1月）には埋蔵文化財発掘届が提出された。関係機関等が遺跡の取扱い・発掘調査の実施方法等を協議した結果、株原町教育委員会において調査を担当することになった。今回の調査地（第9次調査地）は、第3次調査地の東隣にあたり、同一敷地内での発掘調査となった。

現地調査は、2002年（平成14年）2月6日から同年2月26日まで行った。

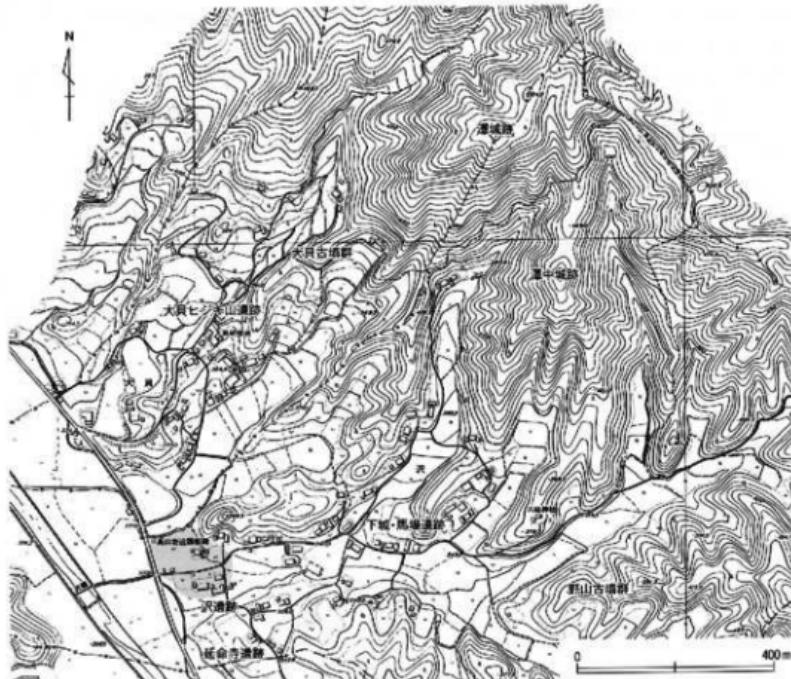


図3 沢遺跡位置図

2 位 置 と 環 境

沢遺跡は、芳野川東岸の標高331.5~335.5mの台地状の畠地に位置し、現在の芳野川からは約150~300mの距離をはかる。遺跡の北方、南方、西方の三方は芳野川に灌ぐ小支流である谷川や芳野川の氾濫原となっている。地形および遺物の散布状況から遺跡の範囲を推察すれば、氾濫原より約1~2m高くなっている畠地が中心となってくる。遺跡の東方には沢城跡から南西にのびる丘陵先端部がひかえ、この山裾までが遺跡の範囲と考えられる。

沢の谷川を挟んで南約200mの尾根上には弥生時代後期の住居跡や古墳時代中期末~後期初頭の古墳、中世の建物遺構（寺院跡？）などが確認されている延命寺遺跡、約400m東方には縄文晚期~弥生時代前期・中世の遺物が出土している下城・馬場遺跡、さらに東方には古墳時代前期の戸石・辰巳前遺跡や古墳時代前期~後期の野山古墳群などの遺跡が確認されている（図3）。

3 遺 跡 の 調 査

(1) 調査区と基本層序

今回の調査地は、遺跡の中心部分よりやや東寄りの宅地内で、1991年に発掘調査を行った第3次調査地の東隣に東西方向のトレンチ（長さ約6.1m、幅約2m）を設定した（図4）。

調査区の基本層序は、北壁での基本土層は1層が現代の整地土、2層が明褐色土等、3層が褐色土等、4層がオリーブ褐色土等、5層が黒褐色砂質土等、第6層がオリーブ褐色の地山となっている（図6）。

(2) 検 出 遺 構

建物基礎の都合上、最小限の発掘調査に留めているが、土坑（SK-01）、溝（SD-01）と思われる落ち込みを検出している（図5、図版1）。

土坑（SK-01）は、その一部を確認したにすぎないが、一辺約2.4m、深さ約0.7mの方形土坑に復元できる。

溝（SD-01）もその一部を確認したにすぎないが、土坑より古い。SK-01と重複する箇所があるものの、幅約3.4m前後の南北にのびる溝と思われる。完掘していないので、深さは明らかでない。

(3) 出 土 遺 物

出土遺物はサヌカイト剝片、須恵器、土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦、土製品（須恵器2次加工品）、鉄釘、砥石などが認められる。

A 土器（図7・8、表3）

土坑、溝、1層~3層の各層より出土しており、以下、遺構・層位ごとにその概要を報告する。なお、陶磁器については、整理の都合上、viにまとめている。各土器の法量等の詳細は、表3に詳しい。

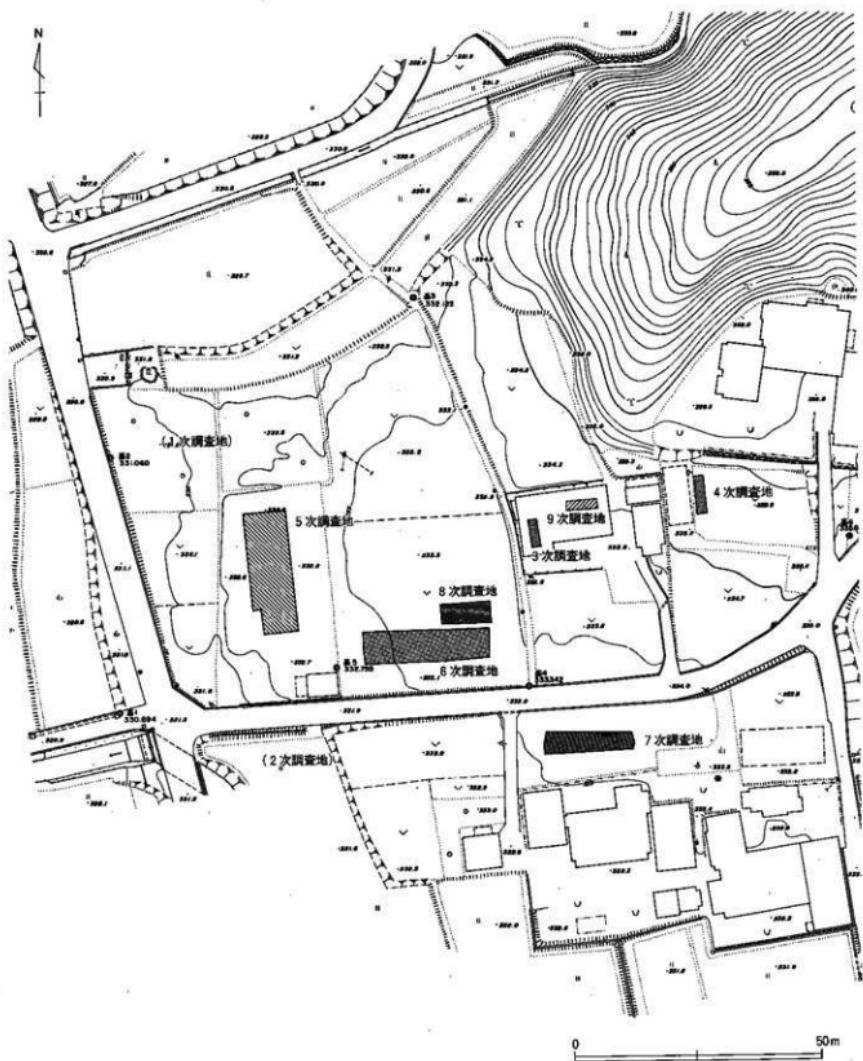


図4 沢遺跡調査位置図

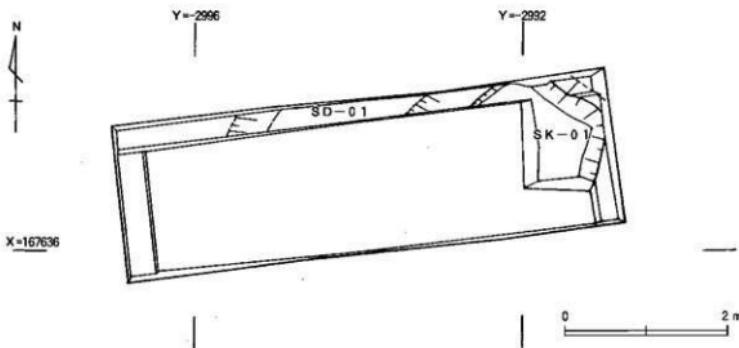
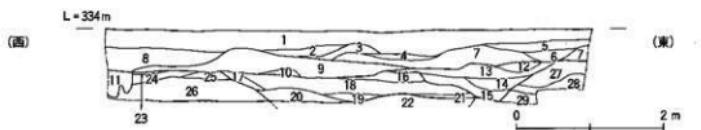


図5 沢遺跡（第9次）遺構平面図



1. 褐色土（整地土）	$<10YR\ 4/4>$	第1層	16. 灰黃褐色土	$<10YR\ 4/2>$
2. 踏褐色土	$<10YR\ 3/4>$		17. 蒼オリーブ褐色粘質土（炭・鉱土含む）	$<2.5Y\ 3/3>$
3. 踏オリーブ褐色土	$<2.5Y\ 3/3>$		18. 褐色土	$<7.5YR\ 4/3>$
4. オリーブ褐色粘質土	$<2.5Y\ 4/4>$		19. 踏褐色土	$<10YR\ 3/3>$
5. 灰褐色砂質土	$<7.5YR4/2>$	第2層	20. オリーブ褐色土（やや砂質）	$<2.5Y\ 4/4>$
6. オリーブ褐色土（糠含む）	$<2.5Y\ 4/4>$		21. 灰赤褐色土	$<5YR\ 3/4>$
7. 明褐色土	$<10YR\ 3/3>$		22. 灰赤褐色土（炭・鉱土含む）	$<5YR\ 3/3>$
8. にぶい黄褐色土	$<10YR\ 4/3>$		23. 黄褐色砂質土	$<10YR\ 5/6>$
9. 褐色土	$<10YR\ 4/5>$	第3層	24. オリーブ褐色土	$<2.5Y\ 4/3>$
10. 灰黃褐色砂質土	$<10YR\ 4/2>$		25. にぶい黄褐色砂質土	$<10YR\ 5/3>$
11. 褐色土（やや粘質）	$<7.5YR4/3>$	ビット	26. 黑褐色砂質土	$<7.5YR3/2>$
12. 硫褐色粘質土	$<10YR\ 3/6>$		27. 灰黃褐色砂質土	$<10YR\ 4/2>$
13. オリーブ褐色砂質土	$<2.5Y\ 4/6>$		28. オリーブ褐色土（やや粘質）	$<2.5Y\ 4/3>$
14. にぶい赤褐色砂質土	$<5YR\ 4/3>$		29. オリーブ褐色土（やや粘質）	$<2.5Y\ 4/3>$
15. にぶい赤褐色土	$<5YR\ 4/3>$			

図6 沢遺跡（第9次）土層断面図

i SK-01出土土器（図7）

土師器 皿（1） 口縁部は直線的に外上方へのび、口縁部を尖り気味に仕上げる。

ii SD-01出土土器（図7）

土師器 土釜（2・3） 2は広口の口縁部で、外反状につくる。口縁端部をやや上方へのばし、断面形態を方形につくる。3は広口の口縁部を外反状につくる。口縁端部をやや上方へ肥厚させ、丸くする。

瓦器 梶（4） 底部外面には、断面形態が逆三角形の高台が付き、底部内面（見込み部）に連結輪状暗文を施す。

iii 第1層出土土器（図7）

須恵器 壺（5） 体部外面に格子ふう叩き目文。体部内面に同心円文を施す。

土師器 皿（6～11） 6の口縁部はやや外反気味に外上方へのび、口縁端部は丸い。底部は全体がやや上げ底状である。7の口縁部は内彎して外上方へのび、口縁端部は丸い。8の口縁部は内彎して外上方へのびる。口縁端部はやや上方へ屈曲し、丸い。9の口縁部はやや内彎して外上方へのび、口縁端部を尖り気味に仕上げる。10の口縁部はやや内彎して外上方へのび、口縁端部を丸く仕上げる。11の口縁部はやや内彎して外上方へのびる。口縁端部は外反し、丸く仕上げる。底部は丸い。

土師器 炮烙（12～18） 12の口縁部は上方へのびる。13の口縁部は外上方へのび、口縁端部は外反する。14の底部から口縁部は屈曲し、口縁部はやや内彎気味に上方へのびる。15・16の口縁部は外反気味に外上方へのび、口縁端部は外反する。口縁部下半には断面形態が三角形の突帯をつける。17の口縁部はやや内彎気味に外上方へのび、口縁端部は外反する。口縁部下半には断面形態が三角形の突帯をつける。18の口縁部は外上方へのびる。口縁部下半には断面形態が三角形の突帯をつける。

瓦器 梶（19～21） 19の体部は内彎して外上方へのびる。口縁端部は外反し、内側には沈線を施す。内面には密な暗文。外面にはやや密な暗文を施す。20の体部は直線気味に外上方へのびる。口縁端部内側には浅い沈線を施す。内面には粗い暗文を施す。21は底部外面に低い逆三角形の高台を貼り付ける。内面には粗い暗文が認められる。

瓦器 皿（22） 体部は内彎して外上方へのび、口縁端部は外反する。内面には平行線状暗文を施す。

iv 第2層出土土器（図7）

土師器 皿（23・24） 23は灯明皿である。口縁部は内彎して外上方へのび、口縁端部を尖り気味に仕上げる。24の口縁部は内彎気味に外方へのび、口縁端部は外反する。

土師器 炮烙（25・26） 25の口縁部は直線的に上方へのびる。26の口縁部は外反して外上方へのび、口縁部下半には断面形態が三角形の突帯をつける。

瓦器 梶（27） 27の口縁部は内彎して外上方へのびる。口縁端部内面には沈線を施す。内外面に粗い暗文が認められる。

v 第3層出土土器（図7）

黒色土器 梶（28） 底部に逆三角形の高台を貼り付ける。底部内外面には平行にヘラミガキを施す。

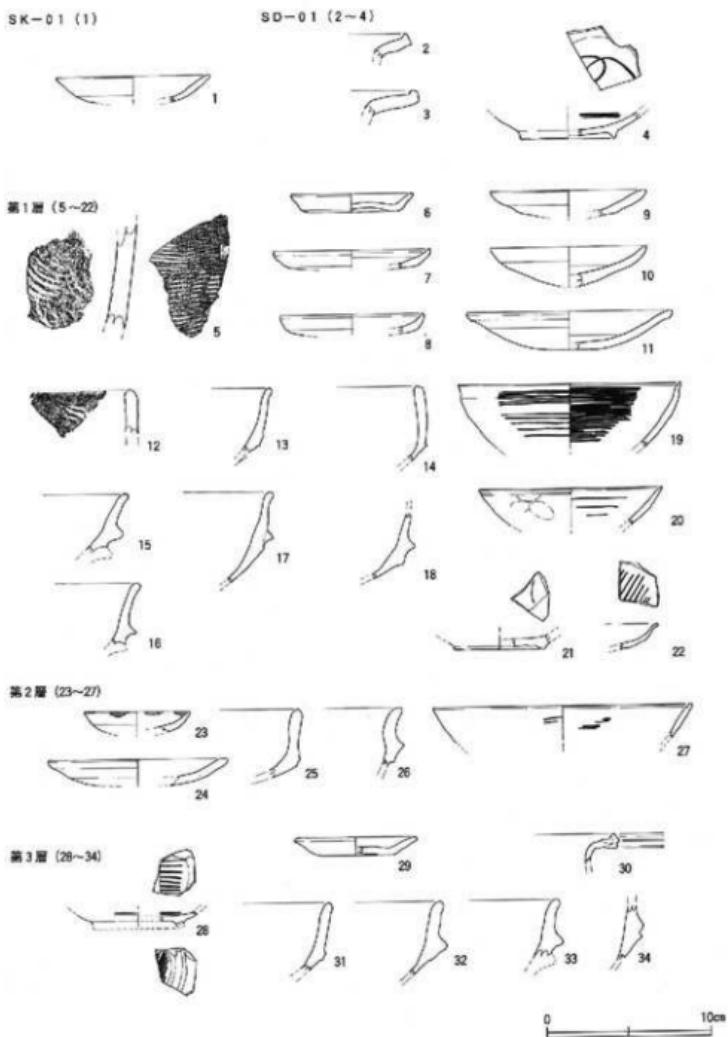


図7 沢遺跡（第9次）出土土器実測図(1)

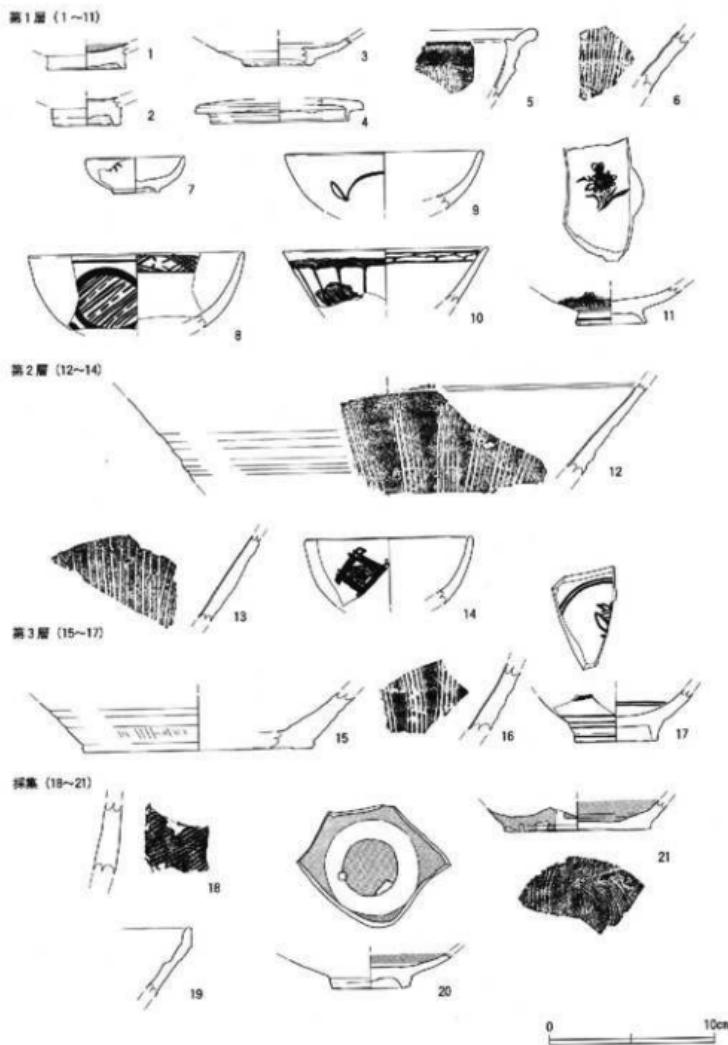


図8 沢遺跡（第9次）出土土器実測図(2)

土師器 皿 (29) 口縁部は直線的に外上方へのび、口縁端部はやや外反する。

土師器 土蓋 (30) 口縁部を広口状に外反させ、端部を上方へ短くのばす。口縁端部外面には沈線をめぐらせる。

土師器 炮烙 (31~34) 31の口縁部は直線的に外上方へのび、口縁端部は外反する。32・33の口縁部は外上方へのび、口縁端部は外反する。口縁部下半には断面形態が三角形の突帯をつける。34の口縁部は外上方へのびる。口縁部下半には断面形態が三角形の突帯をつける。

vi陶磁器 (図 8)

a 第1層出土陶磁器 (1~11)

1~6は陶器である。1・2は施釉陶器碗の底部破片。3は皿、4は平蓋である。5・6は擂鉢。5は口縁部を強く外反させ、内面に段をもつ。6は焼締陶で、擂目を密に施す。信楽であろうか。7~11は国産染付磁器で、いずれも碗である。7は口径・器高とも小さく、ミニチュアであろうか。8・9は丸碗で、8は外面に丸文を、口縁内面に四方捺を施す。肥前系であろう。肥前磁器では、18世紀初めに内面口縁下の四方捺が出現し、18世紀中頃以降に流行¹⁷するという。よって、概ね18世紀の範囲でとらえられよう。10は直線的に開く器形である。11は底部片で、見込みに花文をあしらう。破片のため、外面の文様モチーフは明らかにしない。

b 第2層出土陶磁器 (12~14)

12・13は擂鉢体部片。12は焼締陶で、擂目の上に横位の沈線を施す。沈線は2条確認できるが、破片のため条数は不明である。信楽であろうか。14は染付磁器丸碗である。井桁状の区画内に菊花文を描く。

c 第3層出土陶磁器 (15~17)

15は焼締陶器鉢の底部。16は同じく擂鉢の体部片。17は磁器碗の底部。見込みには2重の圓線と文様を施すが、その意匠は不明である。

d 採集資料 (18~21)

18は中世須恵器の体部片。19は陶器鉢の口縁部。細片のため条線は観察できないが、擂鉢であろう。20は施釉陶器皿の底部。見込みはいわゆる蛇の目釉剥ぎで、砂目積みによる目跡が2箇所認められる。疊付にも4箇所砂目が付着しており、窯詰時に4箇所砂目を置いたことがわかる。蛇の目釉剥ぎで砂目をもつことから、唐津Ⅲ期²¹に相当する。17世紀後半の所産である。21は施釉陶器壺の底部で、底面部外面に回転糸切り痕が認められる。

(陶磁器の項 横澤 慎)

B 土製品 (図 9)

須恵器壺の体部を隅丸方形に整形し、各面を研磨した2次加工品である。1隅を残すのみで、その全容は明らかでないが、現存長3.8cm、現存幅3.7cmを測る。色調は内面が青灰色、外表面がぶい黄褐色を呈し、胎土は精良、焼成は堅緻である。第2層出土。

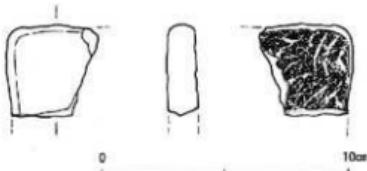


図 9 沢遺跡 (第9次) 出土土製品実測図

C 金属製品（図10、表4）

鉄釘 いずれも角釘である。2の頭部はL字状に折り曲げ、現存長2.6cmを測る。その他は頭部、先端部とも消失する。1・4が第1層、2が第2層、3がSD-01出土である。これらの計測値等は表4にまとめている。

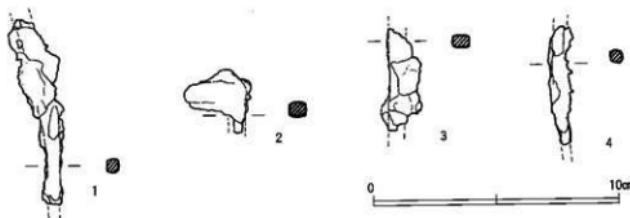


図10 沢遺跡（第9次）出土鉄製品実測図

表4 鉄釘計測表

(単位=cm)

挿図番号	全長（現存長）	身部断面（数値は断面図位置）	頭部の形態	備考
10-1	(7.6)	角 0.5×0.5	—	第1層出土
10-2	(2.6)	角 0.6×0.7	折り曲げ(L字状)	第2層出土
10-3	(4.2)	角 0.5×0.7	—	SD-01出土
10-4	(4.9)	角 0.5×0.5	—	第1層出土

D 石製品（図11）

砥石 1は現存長5.7cm、現存幅3.1cm、現存厚0.4cm～1.0cmである。2面を残すのみで、大半が消失している。凝灰岩製と思われる。第3層出土。2は凝灰岩製で、現存長4.5cm、現存幅4.0cm、現存厚0.1cm～1.0cmである。両端は消失しているが、裏面は欠損面を再利用しており、この断面形態は三角形を呈する。径約0.1cmの穿孔が2ヶ所に認められる。第1層出土。

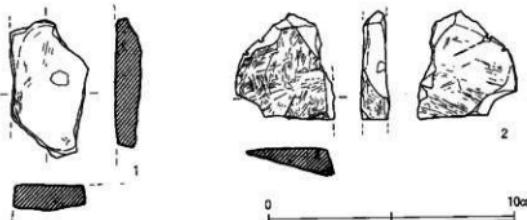


図11 沢遺跡（第9次）出土砥石実測図

4 まとめ

3次・4次調査と同様、今次も縄文時代～弥生時代の明確な遺構・遺物は認められず、これらの調査地付近の山裾までは、当時の居住域が広がっていないものと推定できる。これまでの調査から山裾部分まで開発が進むのは、中世以降と考えられ、4次調査³⁾では13世紀～17世紀、今次では13世紀中葉～18世紀中葉の遺構・遺物を検出している。明確な建物遺構は未検出ではあるが、現在も山裾の畠地には、多くの中近世土器の細片が散布しており、ここに当時の建物遺構等があったものと思われる。

5 抄 錄

遺 跡 名	沢 遺 蹤	〈奈良県遺跡地図番号 15-D-84、榛原町遺跡地図番号2-544〉
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字沢1413-1番地	
遺 跡 規 模	南北約130m、東西約150m	
種 別	縄文時代～中世の遺物散布地、縄文時代～弥生時代の集落跡	
調 査 主 体	榛原町教育委員会	
調 査 担 当 者	榛原町教育委員会 生涯学習課 技師 柳澤一宏	
調 査 原 因	個人住宅改築工事（事業者：小西正直）	
現地調査期間	2002年（平成14）2月6日～2002年2月26日	
調 査 面 積	12m ²	
検 出 遺 構	土坑、溝	
検 出 遺 物	サヌカイト剝片、須恵器、土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦、土製品（須恵器2次加工品）、鉄釘、砥石	〈整理箱1箱〉
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）	
調査後の措置	工事実施	

註

- 1) 野上達起 2000「磁器の編年（色絵以外） 1. 碗・小壺・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会
- 2) 盛 峰雄 2000「陶器の編年 1. 碗・皿」『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会
- 3) 柳澤一宏 1993 『榛原町内遺跡発掘調査概要報告書』 1992年度 榛原町教育委員会

表3 沢遺跡(9次)出土土器調査表

擇図番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備考
7-1	土師器 Ⅲ	復元口径 9.6 現存高 1.7	口縁部は直線的に外上方へのび、口縁部を尖り気味に仕上げる。	口縁部内外面はヨコナデ。底部外面はテナデ。内部は指彌正彌。	色調 にぶい黄褐色 (10YR 7/4) 胎土 精良 良好 焼成	残存 1/5 SK-01出土
7-2	土師器 土釜	復元口径 1.5 現存 高	広口の口縁部で、外反状につくる。口縁部をやや上方へのばし、断面形態を方形にする。	内外面ともヨコナデ。	色調 楊色 (7.5YR 7/6) 胎土 精良 良好 焼成	外面に繋付着 SD-01出土
7-3	土師器 土釜	復元口径 1.6 現存 高	広口の口縁部で、外反状につくる。口縁部をやや上方へ肥厚させ、丸くする。	内外面ともヨコナデ。	色調 にぶい褐色 (7.5YR 7/3) 胎土 精良 良好 焼成	SD-01出土
7-4	瓦器 椅	復元高台径 5.8 現存高 1.7	底部外面に断面形態が逆三角形の高台がつく。	底部内面に連続輪状略文を施す。 体外部に捺子ふう叩き目文。 体内部に同心円文。	色調 内面灰白色 (5Y 7/1) 外面灰色 (N 6/) 胎土 精良 良好 焼成	残存 1/4 SD-01出土
7-5	須恵器 壺	復元口径 7.6 現存高	—	体外部に捺子ふう叩き目文。	色調 内面青灰色 (10BG 6/1) 外面オーリーブ灰褐色 (2.5GY 5/1) 胎土 精良 良好 焼成	第1層出土
7-6	土師器 Ⅲ	復元口径 7.6 器高 1.2	口縁部はやや外反気味に外上方へのび、口縁部は丸い。底部は全体がやや上げ底状である。	口縁部内外面はヨコナデ。内部はテナデ。その他は指彌正彌。	色調 内面橙色 (5YR 6/6) 外面橙色 (7.5YR 6/6) 胎土 精良 良好 焼成	残存 1/5 第1層出土
7-7	土師器 Ⅲ	復元口径 9.8 現存高 1.7	口縁部は内側して外上方へのび、口縁部は丸い。	口縁部内外面はヨコナデ。内部はテナデ。その他は指彌正彌。	色調 にぶい褐色 (7.5YR 6/4) 胎土 精良 良好 焼成	残存 1/5 第1層出土
7-8	土師器 Ⅲ	復元口径 9.0 現存高 1.2	口縁部は内側して外上方へのびる。口縁部はやや上方へ屈曲し、丸い。	口縁部内外面はヨコナデ。その他は指彌正彌。	色調 にぶい黄褐色 (10YR 6/3) 胎土 精良 良好 焼成	残存 1/3 第1層出土

押番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備考
7-9	土師器 Ⅲ 復元口径 現存高	9.6 2.1	口縁部はやや内側して外上方へのび、口縁端部を尖り気味に仕上げる。	口縁部内外面はヨコナデ。その他は指頭压痕。	色調 内面 橙色 (5YR 7/6) 外面 橙色 (2.5YR 7/6) 胎土 精良 良好	残存 1/6 第1層出土
7-10	土師器 Ⅲ 復元口径 現存高	9.8 2.5	口縁部はやや内側して外上方へのび、口縁端部を丸く仕上げる。	口縁部内外面はヨコナデ。その他は指頭压痕。	色調 内面 淡黃褐色 (10YR 8/4) 外面 黃褐色 (10YR 8/6) 胎土 精良 良好	残存 1/5 第1層出土
7-11	土師器 Ⅲ 復元口径 器高	12.8 2.4	口縁部はやや内側して外上方へのびる。口縁端部は外反し丸く仕上げる。 底部は丸い。	口縁部内外面はヨコナデ。底部内面はテナデ。その他は指頭压痕。	色調 内面 淡黃褐色 (10YR 8/4) 外面 黄褐色 (7.5YR 7/6) 胎土 精良 良好	残存 1/6 第1層出土
7-12	土師器 灰焰 復元口径 現存高	— 2.8	口縁部は上方へのびる。	口縁部外面は叩きのち、ヨコナデ。その他のヨコナデ。	色調 色色 (5YR 6/6) 胎土 精良 良好	第1層出土
7-13	土師器 灰焰 復元口径 現存高	— 4.0	口縁部は外上方へのびり、 口縁端部は外反する。	口縁部内外面はヨコナデ。底部と口縁部との屈曲部外面はヘラケズリ。	色調 内面 橙色 (5YR 6/6) 外面 にぶい赤褐色 (5YR 5/4) 胎土 精良 良好	外面・口縁部内面に焼付 着 第1層出土
7-14	土師器 灰焰 復元口径 現存高	— 4.0	底部から口縁部は屈曲し、 口縁部はやや内側気味に上方へのびる。	口縁部内外面はヨコナデ。底部と口縁部との屈曲部外面はヘラケズリ。	色調 内面 橙色 (5YR 6/6) 外面 にぶい赤褐色 (5YR 5/4) 胎土 精良 良好	外面・口縁部内面に焼付 着 第1層出土
7-15	土師器 灰焰 復元口径 現存高	— 3.6	口縁部は外反気味に外上方へのび、 口縁端部は外反する。口縁部下半には 断面形態が三角形の突部をつけるが、 その端部は丸い。	口縁部内外面はヨコナデ。底部と口縁部との屈曲部外面はヘラケズリ。	色調 内面 にぶい橙色 (7.5YR 7/4) 外面 にぶい橙色 (7.5YR 6/4) 胎土 精良 良好	外面に焼付着 第1層出土

揮団番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備考
7-16	土師器 壺	復元口径 現存高	-	口縁部は外反気味に外上方へのび、口縁等部と口縁部との屈曲部外面は反する。口縁部下半には断面形態が三角形の突帯をつける。	底面 外面 良好 良好 良好 良好	内面に赤い黄褐色 (10YR 6/3) 外側 灰褐色 (7.5TR 5/2)
7-17	土師器 壺	復元口径 現存高	-	口縁部はやや内轉気味に外上方へのび、口縁等部と口縁部との屈曲部外面は外反する。口縁部下半には断面形態が三角形の突帯をつける。	底面 内外面に葉付着 第1層出土	内面に葉付着 外側 灰褐色 (7.5TR 5/2)
7-18	土師器 壺	復元口径 現存高	-	口縁部は外上方へのびる。口縁部下半には断面形態が三角形の突帯をつける。	底面 内外面に葉付着 第1層出土	内面に葉付着 外側 灰褐色 (7.5TR 5/2)
7-19	瓦器 壺	復元口径 現存高	13.8 4.0	体部は内斂して外上方にのびる。口縁端部は外反し、内側には沈線を施す。	内面 灰色 (N 4/)	残存 1/8 第1層出土
7-20	瓦器 壺	復元口径 現存高	11.4 2.3	体部は直線気味に外上方にのびる。口縁端部内側には浅い沈線を施す。	内面 灰色 (N 6/) 外面 灰色 (N 5/)	残存 1/8 第1層出土
7-21	瓦器 壺	復元高台径 現存高	5.6 0.9	底盤外間に低い逆三角形の高台を貼り付ける。	胎土 焼成 良好 良好 良好 良好	青灰色 (5B 5/1)
7-22	瓦器 壺	復元口径 現存高	-	体部は内斂して外上方にのび、口縁端部は外反する。	内面に平行状凹弦文。 第1層出土	内面に平行状凹弦文。 外側 灰褐色 (7.5TR 5/2)
7-23	土師器 (火明皿)	復元口径 現存高	6.6 1.3	口縁部は内斂して外上方へのび、口縁端部を尖りの他は指頭圧痕。気味に上ける。	胎土 焼成 良好 良好 良好 良好	浅薄褐色 (10YR 8/3) 口縁部に葉付着 外側 灰褐色 (7.5TR 5/2)

押 固 番 号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備考	
7-24	土師器 Ⅲ 復元口径 現存高	11.0 1.6	口径に対して器高が低い。口縁部は内壁気味に外方へのび、口縁端部は外反する。	口縁部内外面はヨコナデ。底部外面は指頭圧延。	色調 明黄褐色 (10YR 7/6) 胎土 精良 焼成 良好	残存 1/8 第2層出土	
7-25	土師器 灰焰	復元口径 現存高	4.2	口縁部は直線的に上方へのびる。口縁部とその屈曲部外面はヘラケズリ。	口縁部内外面はヨコナデ。底部から口縁部は屈曲し、口縁部は直線的に上方へのびる。	色調 褐色 (5YR 6/6) 胎土 精良 焼成 良好	外面に焼付着 第2層出土
7-26	土師器 灰焰	復元口径 現存高	3.7	口縁部は外反して外上方へのびる。口縁端部下方に断面形態が三角形の突帯をつける。	口縁部内外面ともヨコナデ。内外面とも外上方へのびる。口縁端部下面には断面形態が三角形の突帯をつける。	色調 にぶい黃褐色 (10YR 7/3) 胎土 精良 焼成 良好	外面に焼付着 第2層出土
7-27	瓦器 楼	復元口径 現存高	16.0 2.2	口縁部は内側して外上方へのびる。口縁端部内面には沈線を施す。	内外面に粗い等文。	色調 暗灰色 (N 3/) 胎土 精良 焼成 良好	残存 1/1 第2層出土
7-28	黒色土器 楼	復元高台径 現存高	0.9	底部に逆三角形の高台を貼り付ける。	底部内外面には平行にヘラミガキを施す。	色調 暗青灰色 (5PB 3/1) 胎土 精良 焼成 良好	残存 1/7 第3層出土
7-29	土師器 Ⅲ 器高	復元口径 現存高	7.6 1.1	口縁部は直線的に外上方へのび、口縁端部はやや外反する。	底部内外面は指頭圧延。その他のヨコナデ。	色調 にぶい褐色 (7.5YR 7/4) 胎土 精良 焼成 良好	残存 1/4 第3層出土
7-30	土師器 土釜	復元口径 現存高	1.8	口縁部を広く口状に外反させ、端部を上方へ短くのぼす。口縁端部外面には沈線をめぐらせる。	内外面ともヨコナデ。	色調 外面 にぶい褐色 (5YR 4/2) 胎土 精良 焼成 良好	外面に焼付着 第3層出土
7-31	土師器 灰焰	復元口径 現存高	4.2	口縁部は直線的に外上方へのび、口縁端部は外反する。	口縁部内外面はヨコナデ。底部と口縁部との屈曲部外面はヘラケズリ。	色調 にぶい褐色 (7.5YR 5/4) 胎土 精良 焼成 良好	外面に焼付着 第3層出土

揮団番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備考
7-32	土師器 土師 燒	復元口径 現存高	— 4.6	口縁部は外上方へのび、 内縁部は外反する。口 縁部下半には断面形態が 三角形の突帯をつける。	内外面ともヨコナデ。 色調 胎土 焼成 精良 良好	にがい黄褐色 (10YR 7/4) 外面に葉付着 第3層出土
7-33	土師器 燒	復元口径 現存高	— 3.7	口縁部は外上方へのび、 内縁部は外反する。口 縁部下半には断面形態が 三角形の突帯をつける。	内外面ともヨコナデ。 色調 胎土 焼成 精良 良好	外面に葉付着 第3層出土
7-34	土師器 燒	復元口径 現存高	— 3.3	口縁部は外上方へのび 形態が三角形の突帯をつ ける。	内外面ともヨコナデ。 色調 胎土 焼成 精良 良好	にがい黄褐色 (7.5YR 6/4) 外面に葉付着 第3層出土
8-1	施釉陶器 碗	復元高台径 現存高	4.8 1.6	高台はは2垂直に立ち上 がり、豊付は内側に面を もつ。	高台は削り出して、高台内 もつ。豊入はみられない。 色調 胎土 焼成 精良 堅密	黒色 (2.5Y 2/1) 淡黄色 (2.5YR 8/3) 浅黃褐色 (10YR 8/4) 残存 第1層出土 1/3
8-2	施釉陶器 碗	高台径 現存高	4.2 1.7	高台はは2垂直に立ち上 がり、高台内はいわゆる 兜巾状を呈する。	高台は削り出して、高台内 は前により2段の段をもつ。 内面は白釉仕。見込みは 豊入が晩しい。 色調 胎土 焼成 精良 堅密	灰白色 (2.5GY 8/1) 暗青褐色 (2.5YR 3/4), にがい赤褐色 (5YR 4/3) 灰色 (N 4/0) 残存 第1層出土 5/6
8-3	施釉陶器 碗	復元高台径 現存高	4.6 1.7	高台はは2垂直。外へ開 きながら立ち上がる器形 で、一度段をもつ。	高台は削り出して、内外とも に段をもつ。内面に灰釉を施 し、豊入が認められる。 色調 胎土 焼成 精良 堅密	灰色 (5Y 6/1) 灰黄色 (2.5Y 7/2) 灰褐色 (2.5Y 7/2) 残存 第1層出土 1/4

押 固 号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備考
8-4	輪軸器 臺	復元口径 現在高 8.6 1.4	天井部はほぼ平らで、天井端より内に入つてかえしをもつ。かえしは直立する。	内外面ともに白施を施し、貫入が認められる。	色調 内面 灰白色(0Y 7/1)、褐色(2.5YR 6/6) 外面 灰白色(0Y 7/1)、褐色(2.5YR 6/6) 胎土 灰白色 (2.5Y 8/2)	現存 1/8 第1層出土
8-5	無輪軸器 擂鉢	復元口径 器高 4.2	外反しながら立ち上がり り、口盤下で屈曲、口盤 は強く外反させる。内面 には突起状の段をもつ。	輪轂を用いたヨコナデで成形。 内外面ともに祀縄を施し、赤 色で内面を発色させる。内面には輪 目を施す。	色調 内面 棕暗赤褐色 (7.5R 2/2) 外面 棕暗赤褐色 (7.5R 2/2) 胎土 にぶい黄褐色 (10Y 7/3) やや密 良好	第1層出土
8-6	無輪轂 輪軸器 擂鉢	復元口径 器高 6.2 2.8 2.2	外反しながら立ち上 がる。	輪轂で成形。内面には輪目を 密に施す。	色調 内面 灰白色(0R 4/2)、赤褐色(10R 4/4) 外面 赤色(10R 5/6)、赤褐色(10R 5/3) 胎土 灰白色 (10Y 7/1)	信楽? 第1層出土
8-7	磁器 碗	復元口径 復元高台径 器高 13.4 4.7	内側しながら立ち上 がり、口盤は丸くおさめる。	内外面ともに透明釉を施す。 内面に長須で文様を描くが、 その意匠は不明。	色調 内面 灰白色 (2.5GY 8/1) 外面 灰白色 (2.5GY 8/1) 胎土 灰白色 (N 8/0)	現存 1/2 ミニチュア? 第1層出土
8-8	磁器 丸碗	復元口径 現存高 12.4 3.6	内側しながら立ち上 がり、口盤は丸くおさめる。	内外面ともに透明釉を施す。 外面は口縁下に團練と丸文。 内面は口縁下に四方神文を描 く。いずれも具頭である。	色調 内面 灰白色 (10Y 7/1) 外面 灰白色 (10Y 7/1) 胎土 精良	現存 1/8 配前系? 第1層出土
8-9	磁器 丸碗	復元口径 現存高 12.4 3.6		内外面ともに透明釉を施す。 外面に吳須で草花文を描く。	色調 内面 灰白色 (5GY 8/1) 外面 明暦灰色 (7.5GY 8/1) 胎土 精良	現存 1/5 第1層出土

揮因番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備考
8-10	磁器 碗	復元口径 現存高 12.8 3.5	直線的に開く器形で、口 縁は丸くおさめる。輪部 は若干外反気味である。 裏下に弧状の文様を描く。	内外面ともに透明釉を施す。 外面は菊花文と、花文?を描く が、その意匠は不明。内面口 縁下に弧状の文様を描く。	色調 内面 灰白色 (SGY 8/1) 外面 灰白色 (SGY 8/1) 胎土 灰白色 (7.5Y 8/1) 精良 壓織	残存 1/4 第1層出土
8-11	磁器 碗	高台径 現存高 4.4 2.2	外に開きながら立ち上がる。 外に開きながら立上が る。高台は「ハ」字状に 開く。	内外面ともに透明釉を施す。外 面の文様意匠は不明。高台に 1条の圓線を施す。見込みに は呉須で花文を描く。	色調 内面 灰白色 (2.5GY 8/1) 外面 灰白色 (2.5GY 8/1) 胎土 灰白色 (5Y 8/1) 精良 壓織	高台完存 第1層出土
8-12	無輪燒 陶器 擂鉢	復元口径 器高 (5.6)	外に開きながら立上が る。	輪縁を用いたヨコナアで成形。 内面に5条1単位の横目と、 その上に2条の横位置線を施 す。	色調 内面 暗赤褐色 (5YR 3/3) 外面 暗赤褐色 (10R 3/2) 暗赤褐色 (2.5YR 4/2) 胎土 黄灰色 (2.5Y 6/1) やや粗 尾織	残存 1/6 信楽? 第2層出土
8-13	無輪燒器 擂鉢	復元口径 器高 —	外に開きながら立上が る。	輪縁を用いたヨコナアで成形。 内外面ともに泥縫を施し、赤 色に発色させる。	色調 内面 黒褐色 (7.5R 2/1) 外面 極暗赤褐色 (10R 2/2) 胎土 淡黃褐色 (10YR 8/3) 粗。砂礫を多く含む。 良好	第2層出土
8-14	磁器 丸碗	復元口径 現存高 10.4 4.2	内側しながら立上が り、口縁は丸くおさめる。 裏下に菊花文を描く。	内外面ともに透明釉を施す。外 面には呉須で井桁状の区画内 に菊花文を描く。	色調 内面 灰白色 (10Y 8/1) 外面 灰白色 (10Y 8/1) 胎土 白色 精良 壓織	残存 1/5 第2層出土
8-15	無輪燒器 鉢	復元底径 現存高 14.2 3.4	底部で一度屈曲し、外に 開きながら立上がる。	輪縁を用いたヨコナアで成形。 底部近くにはハケ状の調整が 認められる。内面はヨコナア で平滑に仕上げる。	色調 内面 橙色 (2.5YR 7/6) 外面 明赤褐色 (2.5YR 5/6) 胎土 にい黄褐色 (10YR 7/4) やや粗 尾織	残存 1/8 第3層出土

掲 番 号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備考	
8-16	無輪焼締 陶器 壺鉢	復元径 現存高	— —	外に開きながら立ち上がる。	輪轂を用いたヨコナダで成形。 内面に5条1単位の縦目を施す。	色調 内面 橙色 (5YR 6/6) 外面 橙色 (5YR 6/6) 胎土 橙色 (5YR 6/6)	第3層出土
8-17	磁器 瓶	復元高台径 現存高	5.0 3.2	内體しながら立ち上がる。高台は削り出しで成形。輪轂を用いたヨコナダで成形。内面に5条1単位の縦目を施す。	高台は削り出しで成形。内外面ともに透明釉を施し、具領で文様を描くが、その章記は不明。外面と見込みに輪轂を施す。	色調 内面 淡白色 (7.5GY 8/1) 外面 灰白色 (7.5GY 8/1) 胎土 灰白色 (N 8/0)	残存 第3層出土
8-18	中世須 壺?	復元径 現存高	— —	—	外面は斜位の平行タキ。内面は平滑なナナド調整。	色調 内面 灰色 (N 6/0) 外面 灰色 (2.5Y 7/1)	胎土採集
8-19	無輪陶器 鉢 (備体)	復元口径 現存高	— —	—	外反しながら立ち上がる。輪轂を用いたヨコナダで成形。内外面ともに泥漿を施し、赤色に発色させる。	色調 内面 暗赤褐色 (10R 3/3) 外面 褐色 (3R 4/4), ない赤褐色 (2.5TR 4/4)	胎土採集
8-20	施釉陶器 壺	高台径 現存高	4.8 2.1	若干の浮気味の立ち上がり。口縁下で屈曲、口縁は上方へのぼしておさめる。内面も口縁下の段付近で内側する。	削り出し高台。内面に縫隙、外面上方に灰施釉で、砂目模目跡が2箇所あり。壺も4箇所に砂付着。	色調 内面 灰白色 (2.5Y 7/1), 緑色 外面 褐オーラ (7.5Y 6/2), 灰褐色 (2.5Y 6/2) 胎土 灰白色 (5Y 7/1)	高台完存 唐津 17世紀後半 胎土採集
8-21	施釉陶器 壺	復元底径 現存高	9.2 1.8	底部で一度屈曲し、外に開きながら立ち上がる。	内外面に輪轂 (焼鉢?) を施す。底面には回転糸切り痕が認められる。	色調 内面 暗赤褐色 (2.5TR 3/2) 外面 極端赤褐色 (10R 2/2) 胎土 淡黃褐色 (10YR 8/3)	残存 1/3 胎土採集

IV 澤城跡第1次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

澤城跡は、中世の宇陀を代表する澤氏の居城といわれ、以前から、宇陀を代表する中世山城のひとつとして注目されてきた。研究者によつていくつかの縄張図が作成されたものの、地形測量調査や発掘調査といった詳細な調査は未実施であった。

近年は、澤城跡を含む山林の荒廃が進行しつつあり、澤城の保存と活用が課題となってきた。一方、地元では「沢・大貝史跡顕彰会」が中心となって、以前から澤城跡及び高山右近の顕彰につとめ、その一環として澤城跡の見学路の整備を計画した。その後、当町と事前の協議がないまま、通称「出丸」を継断する見学路の工事を先行させ、事後に奈良県教育委員会・榛原町教育委員会が知ることとなった(図15)。重機によって造成された見学路は、暫くそのまま利用されてきたが、法面の崩壊や土砂の流失などが認められ、さらに城跡の荒廃が憂慮されることから、奈良県教育委員会・榛原町教育委員会、沢・大貝史跡顕彰会等が協議の結果、今後の保存と活用のためには、旧形に復旧することが望ましいとの意見に至り、土塁や郭の破壊状況の確認、土塁等を復旧するための

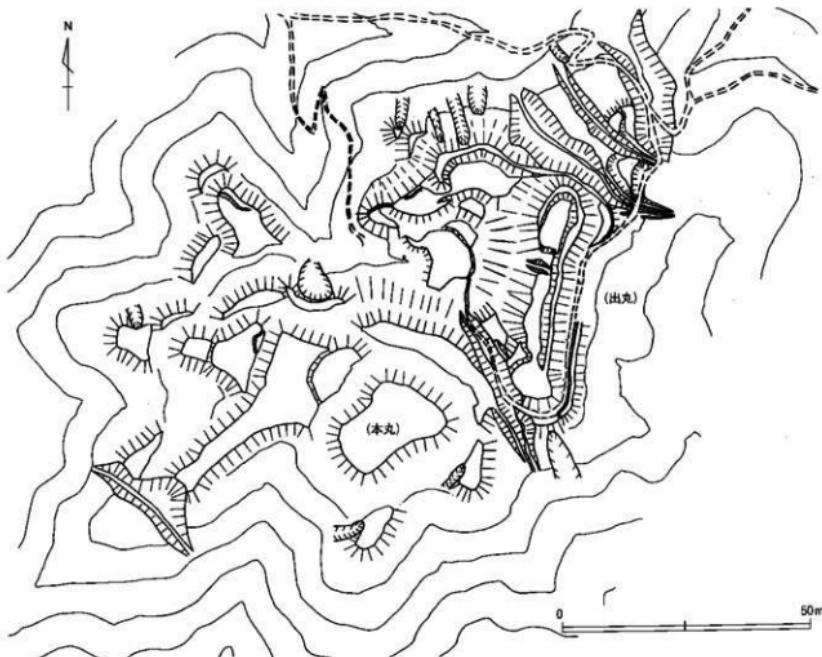


図12 澤城跡縄張図

基礎資料を得る目的で発掘調査を実施することとなった。

事後ではあるが、平成13年10月には、沢・大貝史跡顕彰会から埋蔵文化財発掘届が提出され、関係機関等が届出地の取扱い・発掘調査の実施方法等を協議した結果、榛原町教育委員会において調査を担当することとなった。現地調査は、2001年（平成13年）11月19日に着手し、2002年（平成14年）3月29日に終了した。なお、本調査と並行して、澤城跡の地形測量調査を業者委託で別途実施し、基本資料を作成した。

2 位置と環境

伊那佐山から南東にのびる標高約538mの山頂に造られた中世山城である（図12・13）。城山と呼ばれている山中には、平坦面・土塁・掘切りなどの遺構が良好な状態で残っている。城は、本丸に相当する主郭群（西郭群）、出丸に相当する副郭群（東郭群）で構成され、集落にほど近い南斜面にも小規模な郭と考えられる平坦面もある。この城の築造時期は明らかでないが、天正13年（1585）年頃に廃城となっている。永禄3年（1560）には、高山飛騨守団書が城主となり、幼少の高山右近

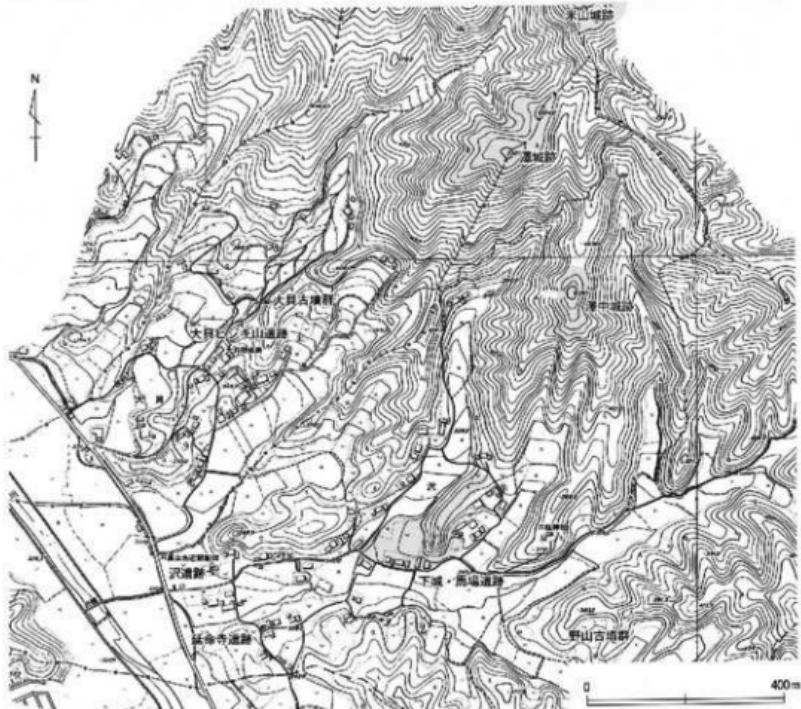


図13 澤城跡位置図

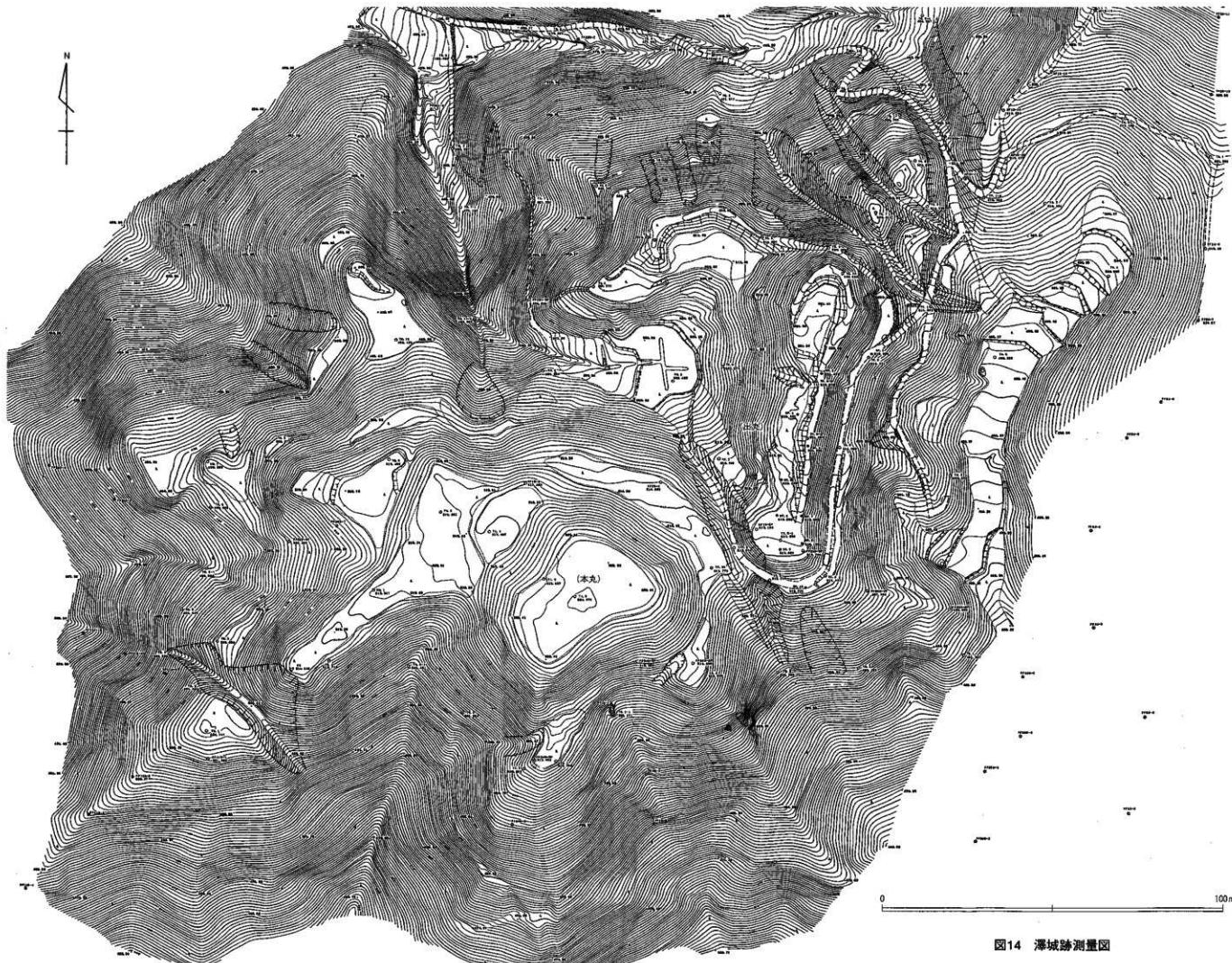


図14 澤城跡測量図

もここで過ごし、右近は、この城内の教会で洗礼を受けている。北東には、米山城と呼ばれる郭群、南方の城下（沢・大貝）には居館や小規模な郭群が築かれ、広義の澤城の範囲に含めることができる（図13）。

澤城は、伊那佐山から南東にのびる尾根を切った二重堀切から大手口をおさえる郭群までの南北約700m、東西約400mに及ぶ広大なもので、東西両端を堀切で遮断された東西約300mの郭群が澤城の主要部分となっている（図13・14）。



図15 澤城跡攪乱範囲図

主要部分の東西には、深い堀切があり、東端は三重の堀切となっている。また、主要部分の中ほどにも堀切が認められ、これを境として東西に郭群を区切ることができ、西郭群は本丸、二の丸等、東郭群は出丸、クラカケバ等と呼称されている郭がある。以下、通称名も併用する。

西郭群は、最高所にある東西約40m、南北約20~30mのやや不整な長方形を呈する主郭（本丸）を中心に展開している。北西と北東には、細長い郭がめぐり、主郭（本丸）と北西郭（二の丸）との斜面は緩傾斜となっている。西郭群は基本的には、土塁が築かれていないが、主郭（本丸）から北へとのびる尾根先端に形成された郭の北端には、小規模な土塁が認められる。

東郭群の中心は、南北約90m、東西約20mの細長い郭（出丸）を中心にしており、西側以外の三方を土塁で囲み、東から南にかけて、通路状になった帶郭が廻る。細長い出丸の中ほどには、小規模な堀切が認められ、南郭と北郭とに分かれる。

3 遺跡の調査

(1) 調査区

見学路工事は、出丸北郭斜面から南郭上土塁裾部分、南郭南斜面と出丸の主要部分のうち約2/3を縦断して敷設されていた（図15、写真1・2）。この工事が先行した部分を発掘調査の対象とし、小規模ではあるものの、適宜、6箇所にトレンチを設定することとした。この工事先行部分のうち、北半を第1地点とし、北から順に1-1トレンチ、1-2トレンチ、南半を第2地点とし、2-1トレンチ、2-2トレンチ、2-3トレンチ、2-4トレンチを設定した（図16）。

(2) 検出遺構

A 1-1トレンチ（図17・18、図版2）

土塁上面に設定したが、明確な遺構は認められない。

B 1-2トレンチ（図17・18、図版2）

土塁上面から平坦面にかけて設定した。土塁は、風化花崗岩類の地山を削り出しによって整形し、その後、盛土（厚さ約30cm）を行う。土塁上面には明確な遺構は認められない。平坦面には5基のピットを検出したが、整地土（褐色砂質土・厚さ約10cm）との前後関係は明らかにできなかった。輪郭を確認したのみで、ピットの掘り下げは行っていない。

C 2-1トレンチ（図19・20、図版3）

土塁斜面から平坦面にかけて設定した。土塁は、地山削り出しによって整形し、その後、盛土を行う。調査範囲内には、明確な遺構は認められない。

D 2-2トレンチ（図19・20、図版3）

土塁上面から平坦面にかけて設定した。土塁は、地山削り出しによって整形し、その後、盛土を行う。平坦面は西側へ緩く傾斜し、土塁裾部分に土坑、ピットを確認している。土坑の一部は、土塁盛土下へと至っている。輪郭を確認したのみで、遺構の掘り下げは行っていない。

E 2-3トレンチ（図19・20、図版4）

土塁斜面から平坦面にかけて設定した。土塁は、地山削り出しによって整形し、その後、盛土を

行う。平坦面は西側へ緩く傾斜し、土坑、ピットを確認している。土坑の一部は、土壠盛土下へと至っている。輪郭を確認したのみで、ピットの掘り下げは行っていない。

F 2-4 トレンチ (図20・21、図版4)

曲輪斜面の破壊状況を確認するため、斜面にトレンチを設定した。表土下は、厚さ約40~50cmの盛土が認められる。盛土下は、地山面となる。



図16 潤城跡調査位置図

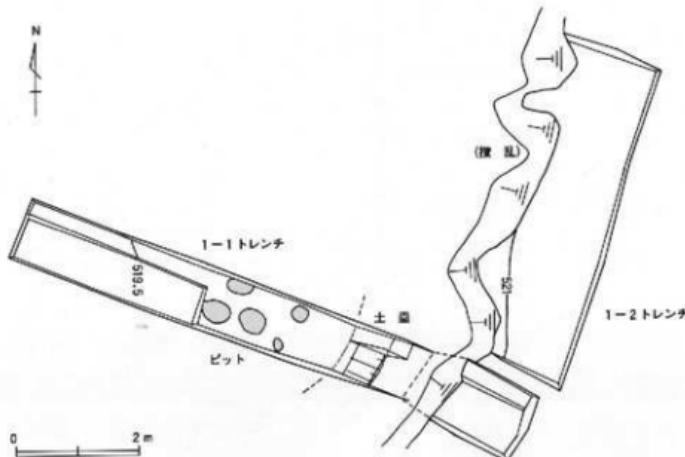


図17 潤城跡1-1・2トレンチ平面図

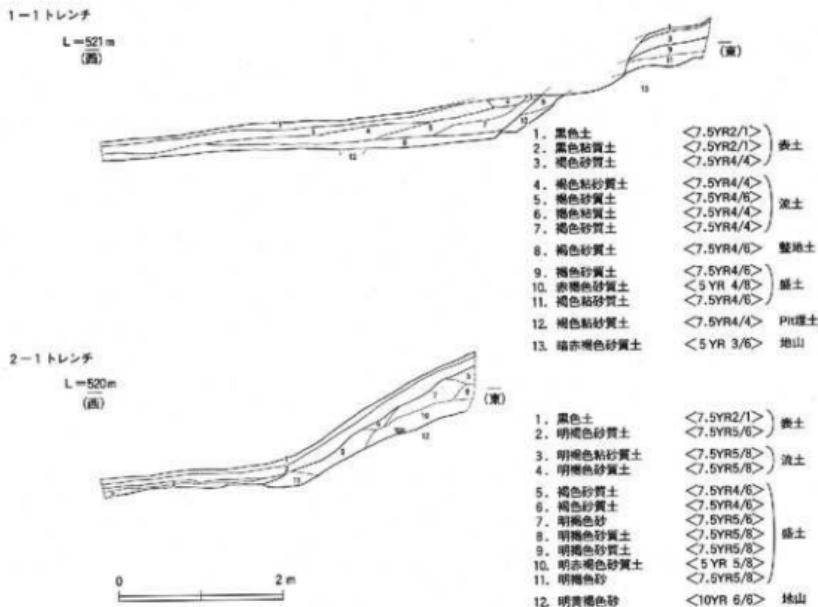


図18 潤城跡トレンチ土層断面図(1)



写真1 潭城跡 第1地点（攢乱状況）



写真2 潭城跡 第2地点（攢乱状況）

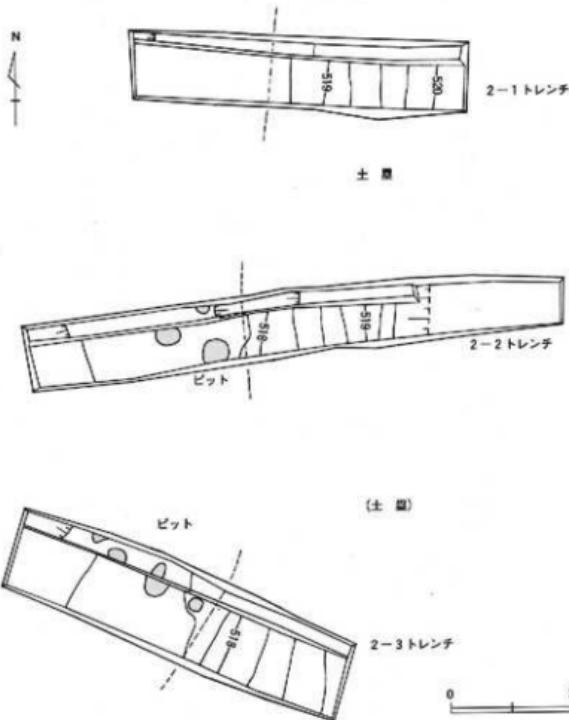
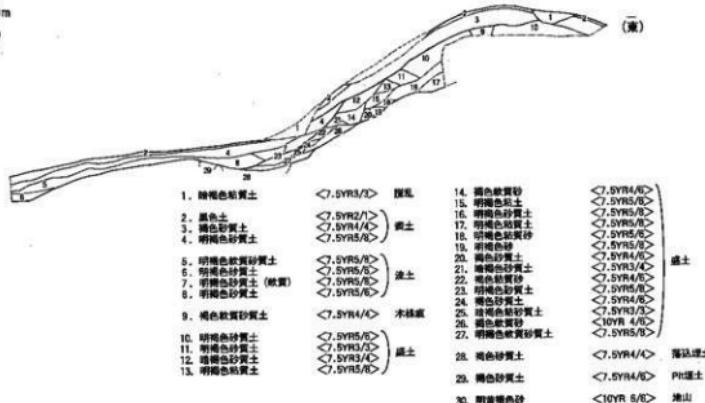
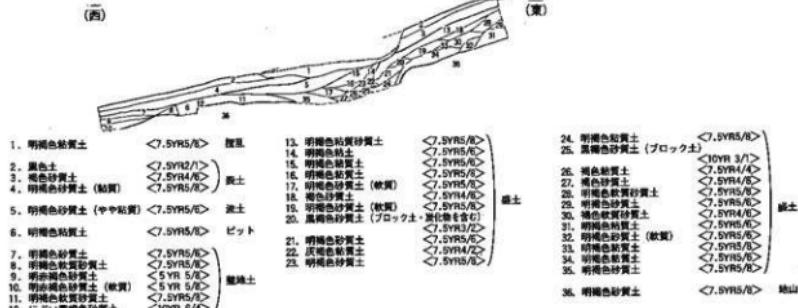


図19 潭城跡 2-1～2-3 トレンチ平面図

2-2 トレンチ

L=520m
(西)

2-3 トレンチ

L=519m
(西)

2-4 トレンチ

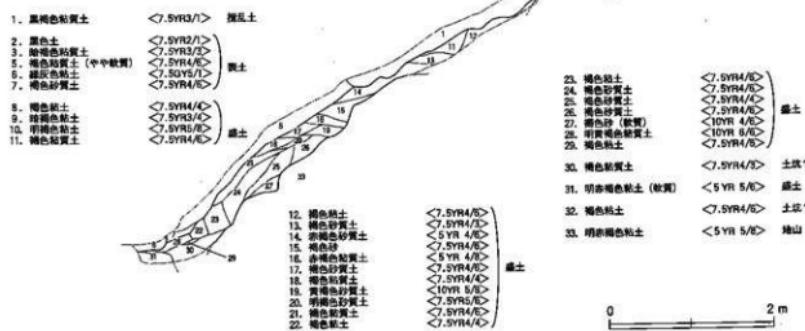
L=517m
(南)

図20 澤城跡トレンチ土層断面図(2)

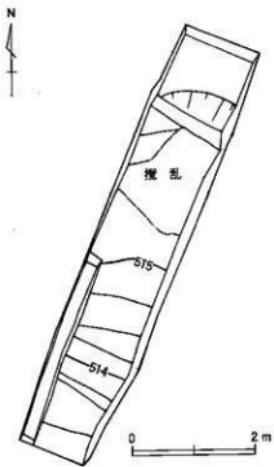


図21 潤城跡 2-4 トレンチ平面図

(3) 出土遺物

トレンチからは土師器、瓦質土器、陶器、鉄炮弾が出土している。また、調査期間中、調査地周辺では瓦質土器、錢貨を探集した。

A 土器 (図22、表5)

土師器 皿 (1~4) 1の口縁部はやや内彎気味に上方にのび、口縁端部を尖り気味にする。底部は平底である。器壁は0.1mm~0.2mmと薄い。第2~4トレンチ土壌盛土内出土。2の口縁部はやや内彎気味に外上方にのび、口縁端部を尖り気味にする。底部は平底である。第2~2トレンチ土壌盛土内出土。3の口縁部はやや内彎気味に外上方にのび、口縁端部を尖り気味にする。第2~4トレンチ土壌盛土内出土。4の口縁部はやや内彎気味に外上方にのび、口縁端部を尖り気味にする。口縁端部に煤が付着する灯明皿である。第2~4トレンチ擾乱土出土。

瓦質土器 摳鉢 5は細片のため、その径は復元できない。体部は直線的に外上方へのびる。口縁端部は外反し、丸くおさめる。体部内面には5条を単位とする擗目を下から上へ施す。通称二ノ丸から三ノ丸間での探集。

瓦質土器 火鉢 6も細片のため、その径は復元できない。体部は直線的に外上方へのび、底部外面縁には高さ約1cmの脚台が付く。第2地点擾乱土探集。

陶器 壺 7は口縁部、底部とも欠損し、体部のみが残る。体部中位に最大径があり、椎形を呈する。外面には暗赤褐色の釉薬を施す。第2~1トレンチ土壌上面出土。

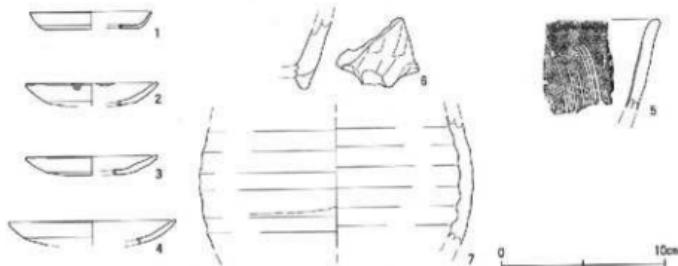


図22 澤城跡出土土器実測図

B 金属製品

鉄炮弾 (図23-1) 全面的に鋳化した鉛製の弾で、やや歪な球形を呈する。径14mm、重量11gをはかる。第2-3トレンチ平坦面第2層出土。

銭貨 皇宋通宝 (図23-2) 宝元2年(1039)初鋳の北宋銭である。部分的に鋳化しているものの完存し、その状況は良好である。径25mm、方孔長7mm、方孔幅6.5mm、厚さ1mm~1.5mm、重量2.4gをはかる。通称 出丸帶郭の土星盛土からの採集である。

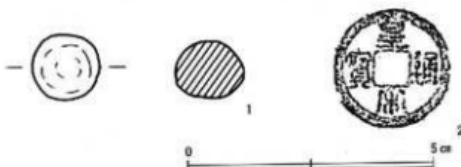


図23 澤城跡出土鉄砲弾・銭貨実測図

4 まとめ

見学路拡幅・新設工事によって破壊された箇所の遺構・遺物の状況ならびに土星等を復旧するための基礎資料を得る目的で発掘調査を実施したため、今回は、最小限の発掘調査に留めている。

土星内側には、平坦面が認められるものの、地形的制約からその幅は比較的狭い。また、土坑、ピット等の遺構も認められるが、建物遺構の有無などの具体的な様相までは明らかにできない。遺構の一部は、土星盛土下にまで及んでいることから、出丸は少なくとも2時期にわたって普請が行われていることも考えられる。詳細は、今後の発掘調査を待ちたい。

従来の縄張図の検討では、西郭群と東郭群との相違は、土星の有無であることが指摘されてきた。土星で城域を画す手法は、永禄期に出現してくるといわれており、松永久秀が用いた手法でもある。先述のとおり、澤城には、永禄3年(1560)に松永久秀配下の高山飛驒守団書が入城している

ことから、東郭群（出丸）は、この頃に改修されたものとも考えられている。一方、西郭群（本丸）は、永禄期に一部、その手が及んでいるものと推定されるが、基本的には、永禄期以前の澤氏の遺構が残されているものと考えられる。

調査後、トレンチは埋め戻し、検出遺構の保護をはかるとともに、調査結果から破壊された斜面及び土墨堀部分復旧・復元を行っている（写真3・4）。なお、出丸の見学の便をはかり、無用の破壊をさけるために、復旧した南斜面には、小規模な見学路を残している。

5 抄 錄

遺 跡 名	澤城跡 <榛原町遺跡地図番号2-524、奈良県遺跡地図番号15-D-79>
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字大貝299番地
遺 跡 立 地	標高約400m～560mの尾根上、主要部分は標高約480m～524mの尾根上
遺 跡 規 模	南北約700m、東西約400m、主要部分は南北約250m、東西約300m
種 別	中世の城跡
調 査 主 体	榛原町教育委員会
調 査 担 当 者	榛原町教育委員会 生涯学習課 主任 柳澤一宏
調 査 原 因	見学道の拡幅・新設
調 査 期 間	2001年（平成13年）11月19日～2002年（平成14年）3月29日
調 査 面 積	50m ²
検 出 遺 構	土坑、ピット、土塁など
検 出 遺 物	土師器、瓦質土器、陶器、錢貨、鉄炮弾
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）
調査後の措置	保存（埋め戻し、復旧）
	<整理箱 1箱>

参考文献

- 榛原町史編集委員会 1959 「榛原町史」 榛原町役場
村田修三 1980 「澤城」『日本城郭大系』第10巻 新人物往来社



写真3 澤城跡 第1地点 (復旧状況)



写真4 澤城跡 第2地点 (復旧状況)

表5 潜埋跡(第1次)出土土器観察表

擲出番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備考		
21-1	土師器 皿	復元口径 器高	7.4 1.0	口縁部はやや内凹気味に上方にのび、口縁端部を尖り氣味にする。底部は平底である。器壁は0.1mm~0.2mmと薄い。	口縁部は内外面ともヨコナデ。底部内部はナデ。底部外面は指剥正丸。	色調 外面 焼成 精良 良好	灰褐色(7.5YR 6/2) 灰灰色(10YR 4/1)	残存 1/8 2-4トレンチ土壌土
21-2	土師器 皿	復元口径 器高	8.0 1.2	口縁部はやや内凹気味に上方にのび、口縁端部を尖り氣味にする。底部は平底である。	口縁部は内外面ともヨコナデ。底部内部はナデ。底部外面は指剥正丸。	色調 胎土 焼成 精良 良好	灰褐色(10YR 5/2) 灰灰色(10YR 4/1)	残存 1/8 2-2トレンチ土壌土
21-3	土師器 皿	復元口径 現存高	10.2 1.5	口縁部はやや内凹気味に上方にのび、口縁端部を尖り氣味にする。	口縁部外面はヨコナデ。その他の外表面は摩滅。	色調 胎土 焼成 精良 良好	灰褐色(10YR 7/4) 灰灰色(10YR 4/1)	残存 1/4 2-4トレンチ土壌土
21-4	土師器 (灯明皿)	復元口径 現存高	8.0 1.4	口縁部はやや内凹気味に上方にのび、口縁端部を尖り氣味にする。	口縁部は内外面ともヨコナデ。底部外面は指剥正丸。	色調 胎土 焼成 精良 良好	浅黃褐色(10YR 8/4)	残存 1/5 口縁部に横付着 2-4トレンチ土壌土
21-5	瓦質土器 擂鉢	復元口径 現存高	— 5.6	体部は直線的に上方へ張り気味にする。	体部内面には5条を単位とする縫目を下から上へ施す。その他の外表面ともヨコナデ。	色調 胎土 焼成 精良 良好	前面 背面 灰灰色(N 3') 灰灰色(N 3')	通称「ノ丸から三ノ丸」 採集
21-6	瓦質土器 火鉢	復元口径 現存高	— 4.2	底部には高さ約1cmの脚がつる。体部は直線的に上方へ伸びる。	体部内面はヨコナデ。体部外面は下から上へのハラケアリ。脚台部はナデ。	色調 胎土 焼成 精良 良好	背面 精良 良好	第2地点 焼土
21-7	陶器 壺	復元体部最大径 現存高	16.8 8.0	体部中位に最大径があり、壺形を呈する。	体部内面はヨコナデ。内外面ともヨコナデ。	色調 胎土 焼成 精良 堅緻	にぶい赤褐色(2.5YR 4/4) 極端赤褐色(10R 2/3) 暗赤褐色(5YR 3/4)	残存 1/8 2-1トレンチ土壌土 出土

図 版



調査地（東から）



SK-01（南から）



1-1 トレンチ（西から）



1-2 トレンチ（南から）



2-1 トレンチ（西から）



2-2 トレンチ（西から）



2-3 トレンチ（西から）



2-4 トレンチ（南西から）

報告書抄録

ふりがな	はいばらちょうないいせきはつくつちょうさがいようほうくしょ							
書名	榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 2001年度							
副書名								
卷次								
シリーズ名	榛原町文化財調査概要							
シリーズ番号	26							
編著者名	柳澤一宏、横澤 慎							
編集機関	榛原町教育委員会							
所在地	〒633-0292 奈良県宇陀郡榛原町大字下井足17番地の3 TEL 0745-82-1301㈹							
発行年月日	西暦 2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
市町村	遺跡番号							
沢 遺跡 (第9次調査)	奈良県宇陀郡榛原町 大字沢1413-1番地	29383		34度 29分 19秒	135度 58分 02秒	2002.02.06 2002.02.26	12	個人住宅 建設工事
澤城跡 (第1次調査)	奈良県宇陀郡榛原町 大字大貝299番地	29383		34度 29分 48秒	135度 58分 27秒	2001.11.19 2002.03.29	50	見学路の 拡幅・新設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
沢 遺跡 (第9次調査)	遺物散布地	縄文～古墳、 中世	土坑、溝	サヌカイト剝片、須 恵器、土師器、瓦器、 陶器、磁器、瓦、土 製品、鉄釘、砥石				
澤城跡 (第1次調査)	城跡	中世	土坑、ピット、 土塁	土師器、瓦質土器、 陶器、錢貨、鉄炮弾				

権原町内遺跡発掘調査概要報告書 2001年度

権原町文化財調査概要 26

2003年 3月31日 発行

編集
権原町教育委員会
発行 奈良県宁光郡権原町大字下井足17番地の3

印刷 株式会社 アイブリコム
奈良県磯城郡田原本町千代360-1